

---

# 託す人

木下 汰我

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

託す人

### 【NZコード】

N1824T

### 【作者名】

木下 汰我

### 【あらすじ】

昔の話。まだ妖怪もいなかつた時代。もう忘れられたかもしだい話。

オリジナル設定あり。

「ここで俺は一つの考察をしてみようと思つ。

君は幻想郷という世界を知つてゐるだろつか？　もちろん君なら知つてゐるだろう。俺ももちろん知つてゐる。そして俺はその世界が現実に存在する可能性に触れた。だから可能性を探し、こいつやって考察を重ねてゐるのだ。かの地に少しでも近づく為に。

俺の考察からの2つの仮説はこれだ。

1、可能性が生んだ世界。ここでは幻想郷は『東方Project』と呼ばれるPCゲームの舞台になつてゐる世界だ。ゲームの舞台の世界が現実の存在する訳がない。ならこう考えればいい『東方Project』と呼ばれるPCゲームなど存在しな世界があると。平行世界、よく漫画などで使われる言葉だから君も耳なじみがあるだろう。いくつにも分岐した世界、その中の幻想郷が存在する世界、ひとつはゲームとして存在する世界、ひとつは妖怪たちが実際に住み暮らす世界。2つの世界は幻想郷が存在するという形で近しい間柄だらう、なら俺の世界に幻想郷の可能性が流れてもおかしくはないだらう。

2、幻想郷は今はまだ存在しない。どこかの偉い人はいい言葉を残してくれた。「人間が想像できる事は、すべてこの宇宙で起きる可能性がある」ならばこれから遠い未来、幻想郷が生まれる可能性があつてもおかしくはない。誰かの想いが、悪い言い方だがたかがゲーム、その一次創作に希望を見出した人たちの想いが集まり、形になりいつか現実になる。だから1の仮説より2の仮説が正しい

と俺は思い信じている。でないと希望を見出せない。

おそれくこんな事を考えていられるのはこれが最後だろう、これから実際生きている現実なんて地獄だ。だから俺はこうやって希望の次に繋ぐことにした。

これを読んでいる君は幻想郷を知っているだろう。もしかしたら幻想郷に生きているかもしれない。だって君のいる世界には幻想郷があるのであるのだから。だからその世界を守つてほしい。その世界は沢山の、少なくとも俺が夢見、希望とした世界なのだから。

遠い未来の、または違う世界の君へ

データを保存しパソコンの電源を落とした。

遺書とでもいえばいいのか、少なくとも俺のいたという痕跡は残す事はできた。たぶん思い残す事はないと思う。残り少ないタバコの火を灯し、ため息と共に煙を吐き出す。俺が死んでも痕跡は残る。痕跡が消えても八意のやつと一緒に月に逃げた人間がいる、人の歴史は消えることはない。それだけでまだ希望が持てる。

それにしても不思議だ、今の地球は日本神話に似ている。要石が抜かれたように多発した地震のせいでの世界情勢がぐちゃぐちゃになり戦争だ。使われた兵器のせいでは太陽は隠れてしまった。しばらくして太陽が出たと思ったら隠れやしない。そのせいでまた戦争。こう見ると日本神話を元にしたといわれる『東方Project』の世界に繋がりそうに思える。なにぶん500年近く前のゲームのせいで資料がないからこれが幻想郷に繋がる歴史なのか確かめようがないのが残念だ。

フィルター近くまで燃えたタバコの火を消し、パソコンで凝り固まつた身体をほぐしていく。

八意のやつは無事に月で生きていくだろうか、なんて心配をしてみる。無駄な心配だ。あいつは俺なんかと同じ人間として比べたら失礼なほどの天才だ。あいつなら上手いことやつていくだろう。それより心配なのは俺のほうだ。おれが八意に付いて行かずに地球上に残った意味を達成しなければ、あいつも集中して月のことを考えれないだろう。俺は決意を固め、人間としての心を残して部屋から出て行く。

これから俺は戦争を始める。人類、いやこれが幻想郷に繋がる歴史なら旧人類最期の戦争だ。戦況は圧倒的に不利。なんたって俺一人対地球に残った人類全てだ。はつきり言つて負け戦に思える。だが負ける訳にはいかない。八意や月に行つたやつらの未来を背負つているのだ。そしてこれは戦争だ。情けなんかかける訳にはいかない。どちらかが滅ぶまで戦いは続く。女だろうと子供だろうとみんな死ぬまで戦いは続く。

ぞ……ぞぞぞ……。

『これより全軍宇宙センターに突撃をする。逆賊はただ一人だ、恐れることはない。英雄と呼ばれた男であつても1人ではなにもできない。戦いに勝利し、月に新たな歴史を築くのだ』

敵の無線の内容が俺の無線に流れた。元同僚、俺を大戦で英雄と始めた彼らとの戦いの合図だ。

昔1人の女性に出会つた。彼女は少しふざけた人だった。なんたつ

て出会いがしらに自分は亡靈だと名乗ったのだから。いくら当時の幼い俺でも信じる訳がない、なんたって世界は科学が支配している。たいていの事柄は科学で証明が出来るのだ。信じる訳がない。それを伝えると彼女はゲラゲラと笑い、そりやそうだと言つた。そして彼女は言葉を続けた、でも亡靈や妖怪、神がいたほうがたのしいだろ。現にあたしがいる幻想郷は楽しいとこだ。それが俺と幻想郷との出会いだつた。

彼女の語る幻想郷は貧困や戦争で潤いをなくしてしまつた俺の心に潤うを与えてくれる御伽話であつた。自然が溢れ、一番高い山には天狗や河童などの多くの妖怪がいて、いたるところで妖精が楽しく遊ぶ。大きな事件がおきても巫女と亡靈の弟子の魔法使いが解決する。妖怪や人間が手を取り合い助け合える世界。本当にそんな希望が溢れる世界があつて欲しいと願つてしまつほどビビ。

それでも信じることなんか出来る訳がなかつた。この世界にそんな自然なんか存在しない、ましてや人間同士で殺しあつてているのに妖怪なんかと手が取り合える訳がない。信じることができなかつた。そんな俺の頭に手を置き、慣れた手つきで撫でてくれた。

「あたしゃ子供がそんな顔をするもんじやないと思つてゐる。特別にあたしが希望をあたえてやろう」

彼女は空いた手を空に掲げた。

「これが幻想の力だ。マスター・スパーク！！」

彼女の手か眩い光が放たれた。そして彼女は光と共に消えた。本当に亡靈だつたかのように。でも確かに撫ぜられた感触や暖かさは残つていた。それから俺は幻想郷という希望を探し続けた。彼女が亡

靈なら取り付かれたと言つたほうがいいかもしれない。希望に取り付かれた。

俺はその時から希望を掴む為に可能性を探し続けた。それが支えになり、あの無残な戦いでも生き残り勝ち続け英雄と呼ばれるようになった。そしてあの戦いよりも無残で虚しい戦いを1人で始める決意が出来たのだろう。八意や他のやつらに希望を託して。

響き渡る銃声、飛び散る血。耳を劈く老若男女の叫び声。あいつらを月に行かす訳にはいかない。彼らは人の死を好みすぎる、そして英雄と言われ沢山の人を殺した俺も。月に行けばまた争いを引き起こす、俺たちはあまりにも穢れすぎている。だから俺は彼らを殺す。今の地上に住む、生きる、死ぬそれだけ罪なのだ。あまりに穢れ、未来への希望をなくした俺たちは。

「これで最後だ！！」

手榴弾を迫る彼らに投げつける。一瞬で素粒子にまで分解する光が光る。あの時見た幻想の力とは違う暖かさがない、ただただ冷たいだけの光と共に俺の敵は一人残らず消えた。男も女も、子供も老人も。

彼らだけて生きたかっただけだ。あまりに穢れ、未来への希望をなくしてしまっただけだ。あまりにも人間らしく、人間という枠の中で生きただけだ。これでは俺が妖怪のようだ。ただ生きたいだけの人間ころしたのだ。あの時、決意を固めた時に心を置いていつ

たのだ、その時俺は妖怪になつたのだ。妖怪、こんな形で幻想郷に近づくとは思つていなかつた。

「あはは、本当は俺も月に行くつもりだつたのに。だからセンターを壊さずにあいつら殺すのを選んだのに。妖怪になちまつたら月には行けねえや」

光で淨化されたここはさつきまで殺し合いをしてたとは思えないほど綺麗だ。

「本当に月に行きたかったな……。ハ意に会いたいよ。まだ好きとか言えないのに、せかつく感じになつてたのに。どうせ成就しないならちゃんと振られたかったな。まあ、あいつが幸せに生きてくれたらいいか。でも結婚はして欲しくないかも、これはただの我假か。あいつ天才すぎて孤独だからな、心配だ。あいつにも家族つて呼べる存在が出来て欲しいな。あいつ冷たく見えるけど優しいから誰か本当に慕つてあげて暖かさを与えて欲しい。あいつ頭いいけど、だからこそ悩むから誰か天真爛漫に考えなくとも大丈夫なことを教えてあげて欲しい。あいつ一人でなんでも出来るから信じる事を知らない誰かハ意の一生を笑い合つて、信じあえるものにして欲しい」

俺は拳銃を頭に突きつけた。けじめだ。地上に住む、生きる、死ぬそれだけ罪、そのとおりだ。俺自身も罪を背負い生きた。だからハ意の、他のやつらの穢れ、罪を背負い死ぬ。それが妖怪まで墮ちた俺のけじめ。そして次に生まれる罪人たちに希望を託す。いつか穢れた人間も、墮ちた妖怪も手を取り合える理想郷の夢を託す。あの時俺が希望が持てたように、希望を忘れないことを祈つて。

「さよなら、××。愛してた」

銃声が響いた。

想いが集まり、可能性へと続く。

## (後書き)

いつも汰我です。

勢いで書いた作品です。

まあ、なんともいえない感じですが、個人的には納得している感じです。

ちなみにあの亡靈は魅魔さまで。なんで魅魔様が？って感じですよね。

個人的には誰でもよかつたんです。カリスマがあれば。（苦）

カリスマがあり時間移動ができそうな人物で考えて、紫、魅魔様が候補だつたんです。紫はスキマ、亡靈はそこにいていない時間の概念から外れた存在って考えて時間越えれると思ってます。

その中で幻想郷をなんだかんだで愛して、胡散臭くない魅魔様起用です。

あと人が月に移る話を書きたかったんです。某輪界廻で書きかけなんですけど、あれ消化不良で……。だからここで書きました。

まあそんな感じの話です。

楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただけたならさいわいです。

では、また機会があれば会いましょう。

読者の皆様に深い感謝を……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1824t/>

---

託す人

2011年10月7日00時47分発行